原著論文 ヨーロッパ地域とアジア太平洋地域における DESD 国別指標開発の地域プロジェクトに関する比較

佐藤 真久*・中山 修一**
(武蔵工業大学*・広島経済大学**)

Comparing Development of DESD National Indicators' Regional Projects in Europe and the Asia-Pacific Region

Masahisa SATO* and Shuichi NAKAYAMA**
The Musashi Institute of Technology*, Hiroshima University of Economics**
(受理日 2008 年 10 月 10 日)

Following the start of the “Decade of Education for Sustainable Development (2005-2014, DESD)” in 2005, UNESCO, the lead agency for the decade, announced the DESD International Implementation Scheme (DESD-IIS) in October, 2005. In the DESD-IIS, “monitoring and evaluation” is one of seven implementation strategies which recommend the identification of suitable and relevant indicators. Accepting the DESD-IIS recommendation, various efforts are under way towards the development of DESD indicators centering on the European and Asia-Pacific regions. This research highlights the UNECE and IUCN-UNESCO's Development of DESD National Indicators' Regional Projects. It also aims to clarify each region projects' characteristics, and identify mechanisms conducive to future DESD monitoring and evaluation through comparison of the projects' (1) implementation overview, (2) implementation content, and (3) evaluation framework. Concerning evaluation frameworks, analysis was conducted using participatory evaluation concepts. Results from this study show commonalities in both projects such as project goals, duration of evaluation activities, evaluation points to be considered; at the same time, it also reveals large discrepancies in prerequisites, evaluation objectives, setting of indicators and implementation approach.

Key words: UNECE, IUCN-UNESCO, ESD Indicators Project, Comparative Analysis,
Descriptive Analysis, Participatory Evaluation

1 はじめに

「国連持続可能な開発のための教育の10年(2005-2014, DESD)」の開始にともない、主導機関である国連教育科学文化機関(UNESCO)は、2005年10月に「DESD国際実施計画(DESD-IIS)」を発表した。DESD-IISでは、モニタリング・評価を7つの戦略の一つとして位置づけ、DESDがきっかけとなって推進される取組みの統合的部分

として、その重要性を指摘している(UNESCO, 2005a)¹⁾。

この勧告を受け、2005年以降、DESDの指標開発とモニタリング・評価にむけた多様な取り組みがヨーロッパ地域とアジア太平洋地域を中心に行われている。とりわけ、国際レベルでは、国連欧州経済委員会(UNECE)の主導の下で55カ国を巻き込んだ評価指標スキーム(以下、UNECE評価スキーム)の開発プロジェクト(以

問い合わせ先 〒224-0015 神奈川県横浜市都筑区牛久保西3-3-1 武蔵工業大学環境情報学部 佐藤真久研究室
E-mail: m-sato@yc.musashi-tech.ac.jp

下、UNECEプロジェクト)や、UNESCOと世界自然保護連合(IUCN)による「アジア太平洋地域国別DESD指標開発ガイドライン²⁾」(UNESCO, IUCN-CEC and Macquarie University, 2007a)(以下、IUCN-UNESCOガイドライン)の開発プロジェクト(以下、IUCN-UNESCOプロジェクト)³⁾などが実施されている。

2 研究目的

本研究は、UNECEプロジェクトとIUCN-UNESCOプロジェクトの(1)実施概要、(2)実施内容、(3)評価枠組み、を分析対象とし、文章分析による相互比較によってプロジェクトの特徴を明確にすることを目的としている。この相互比較は、ESD評価において何を重視しているかを相対的に把握にするだけでなく、プロジェクトの開発と実施プロセスにESD評価の視点がどのように反映されているかを考察する点においても意義があるといえる。本研究では比較結果に基づき、(1)質的評価とログ・フレーム⁴⁾、(2)参加型評価、の視点で整理を行い、地域の評価プロジェクトの開発と実施プロセスから読み取れるESDの視点と、今後の方向性について考察をする。

3 研究方法

まず、分析対象項目:「プロジェクトの実施概要」の比較については、(1)実施背景、(2)開始時期、(3)対象地域、(4)実施主体、(5)加盟国、(6)プロジェクトの特徴、の分類項目に基づき文章分析を行った。分析対象項目:「実施内容」の比較については、国際協力機構が提示しているログ・フレームのPDM(プロジェクト・デザイン・マトリクス)⁵⁾に基づき文章分析を行った(国際協力機構、2001)⁶⁾。PDM構成要素は、(1)上位目標、(2)プロジェクト目標、(3)期待される成果、(4)活動、(5)投入、(6)前提条件、である。さらに、分析対象項目:「評価枠組み」の比較については、国際協力機構が提示している評価枠組みのマトリクス(国際協力機構、2001)⁷⁾を活用し、「その他の特徴」をマトリクスに追加し、国際協力機構の提示する評価枠組みでは十分に記述できない点を加えることとした。さらに、参加型

評価の概念が含まれている項目について、【参】の表示を加えることとした。参加型評価の概念については、国際協力機構による概念表(表7)を参考にした。分析対象項目:「評価枠組み」で採用した分類項目は、(1)評価目的と評価項目、(2)評価の影響、(3)評価を与える手段、(4)主な対象者、(5)評価の実施時期、(6)評価期間、(7)評価者、(8)評価結果、(9)評価参加者の範囲、(10)評価基準、(11)指標群の分類、(12)評価手法、(13)評価の留意点、(14)資金提供者、(15)その他の特徴、である。

4 地域プロジェクトの概要

4.1 UNECEプロジェクト

UNECEプロジェクトは、UNECEが、ESD運営委員会(UNECE Steering Committee on Education for Sustainable Development)⁸⁾を設置し(以下、UNECE-ESD運営委員会)、多様な専門家を巻き込んでDESDの指標開発を行う国際プロジェクトである。UNECEプロジェクトは、UNECE加盟国(合計55カ国、ヨーロッパ地域27カ国)に対して、共通の評価枠組みを提示し、国レベルのモニタリング・評価活動を実施することを目的に2005年3月から開始された。

UNECEプロジェクトの開始には、2003年の「第5回欧州環境閣僚会議」(ウクライナ・キエフ)において採択された「ESD大臣声明(Ministerial Statement on ESD)」と、2005年の「ビリニュス環境・教育大臣会合」(リトアニア・ビリニュス)において採択された「欧州ESD地域戦略(UNECE Strategy for Education for Sustainable Development)」、「ビリニュス実施枠組み(Vilnius Framework for Implementation)」によるものが大きい。

DESDの指標開発にむけた具体的な作業は、UNECE-ESD運営委員会の下に設置された「専門家グループ(Expert Group)」によって調整が行われた。専門家グループの会合は、第一回会合(オランダ・エデ)、第二回会合(スイス・ジュネーブ)、第三回会合(オーストリア・ウィーン)、第四回会合(オランダ・ハーグ)、第五回(オーストリア・ウィーン)で開催され、評価スキー

ム・報告フォーマットの開発とその効果利用にむけた一連の議論がなされてきた。専門家グループ会合においては、欧州ESD地域戦略の目標達成にむけた行動領域についての議論だけではなく、ESDの定義、アプローチ、焦点などについても議論が行われている。また、教育、環境科学、統計学などといった多岐にわたる専門領域の関係者がUNECEプロジェクトの専門家グループに参画している。一方、DESDにおける国別のニーズ・優先事項の明確化と、実行可能性の検討においては、UNECE加盟国の担当部署署がその役割を担っている。このように、2005年にUNECEプロジェクトが開始されて以来、多様な関係者を巻き込んだ段階的な策定作業が行われてきている¹⁰⁾。

専門家グループは、(1) プロセスとしての「地域戦略の実施」、(2) プロセスと成果の質的特性としての「地域戦略の実施による効果」、を反映させるものとして指標開発を位置づけており¹¹⁾、評価活動が単なる結果の評価を意味しない点に言及し、第一回、第二回の専門家グループ会合を通じてその重要性を確認している。さらに、ESD専門家グループは、評価スキームを独立したツールとして利用するのではなく、報告メカニズムの構築や、自立発展性にも配慮した戦略実施にむけたフェーズアウト・アプローチ¹²⁾をも考慮にいたれた包括的な枠組みとして意味づけている(UNECE, 2005a)¹³⁾。

欧州ESD地域戦略の第6章では、「モニタリング・評価の実施は、継続的なプロセスとして見なされるべきであり、それは、進捗評価を行うことを目的とする」と指摘し、プロセスとしての位置

づけを重要視している(UNECE, 2005b)¹⁵⁾。さらに、専門家グループは、今後の進捗を時系列で比較する基礎データとして、ベースライン・データの入手の重要性を指摘している。

UNECEプロジェクトは一連の議論の成果として、政策枠組みと支援体制、投入から、活動、成果、プロセス、持続可能な開発に関する直接的・間接的な効果、社会的インパクト、までを考慮にいたれた評価モデルを開発(図1)し、以下の4つの指標群に基づく評価活動の実施を提案している(表1)(UNECE, 2005a)¹⁶⁾。

表1 UNECEプロジェクトで採用されている指標群

【指標群】チェックリスト指標群 (Checklist Indicators) – 欧州ESD地域戦略の実施にむけて、各国政府が行うべき政策・法的枠組み・規制・統治に関する情報を提供
【指標群】投入指標群 (Input Indicators) – 欧州ESD地域戦略の実施において投入される資源・機会・活動に関する情報を提供
【指標群】活動指標群 (Output Indicators) – 活動を通して得られた結果に関する情報を提供
【指標群】成果指標群 (Outcome Indicators) – 欧州ESD地域戦略によってもたらされたインパクト(価値・態度・選択・地方文化などの質的側面を重視)に関する情報を提供

Note : UNECE, 2005a. を基に筆者作成

専門家グループは、評価目的と指標項目の開発において、継続的な議論を続けており、ESD運営委員会による国別ニーズ・優先事項の明確化と実行可能性に関する議論を指標開発に反映させるアプローチを採用している。さらに、第四回専門家グループ会合(2006年5月、オランダ・ハーグ)と、第二回UNECE-ESD運営委員会(2006年12月、スイス・ジュネーブ)を受けて、以下の6つの評価目的と、18の指標項目を開発した(表2)(UNECE, 2007a)¹⁷⁾。

表2 UNECEプロジェクトの評価目的と指標項目

評価目的1: ESD推進支援のための政策・法的枠組み・施行フレームワークの充実
– 指標項目1-1: ESD推進支援のための前提的方策
– 指標項目1-2: ESD推進支援のための政策・法的枠組み・施行フレームワーク
– 指標項目1-3: SDとESD相互のプロセスのシナジーを支援するための国家政策

図1 UNECE評価モデル¹⁴⁾ (Raaij, R. 2006.)

<p>評価目的2：FE・NFE・IFEを通してのSDの推進</p> <ul style="list-style-type: none"> 指標項目2-1：学校教育におけるSDテーマの取扱い 指標項目2-2：ESD実施のための明確な戦略の提示 指標項目2-3：ESD/SD推進にむけた組織全体アプローチ 指標項目2-4：質的評価/推進システムの記述 指標項目2-5：知識・態度・実践における変化の評価に適したNFE/IFEのESD実施手段と方法 指標項目2-6：マルチ・ステークホルダーによるESD実践 <p>評価目的3：SDを導入するための教授能力を伴った教育者の養成</p> <ul style="list-style-type: none"> 指標項目3-1：教育者研修へのESD要素の導入 指標項目3-2：教育者がESDを協力的に実践するための機会 <p>評価目的4：適切なツールと教材へのアクセス</p> <ul style="list-style-type: none"> 指標項目4-1：ESDのための教授ツールと教材 指標項目4-2：ESDが機能するための教授ツールと教材の質的管理のためのメカニズム 指標項目4-3：ESDのための教授ツールと教材へのアクセス <p>評価目的5：ESDの研究・開発の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> 指標項目5-1：ESD研究の推進 指標項目5-2：ESD開発の推進 指標項目5-3：ESD研究成果の配信 <p>評価目的6：UNESCO地域における協力体制の強化</p> <ul style="list-style-type: none"> 指標項目6-1：UNESCO地域内外におけるESDに関する国際協力
--

Note：UNECE. 2007a. を基に筆者作成

さらにUNECEプロジェクトでは、報告フォーマットの開発をし、第二回ESD運営委員会（2006年12月、スイス・ジュネーブ）において、その報告フォーマットを報告している（UNECE, 2006）¹⁸⁾。この報告フォーマットは、各評価目的に対応した18の指標項目の下で、48の副指標項目（Sub-indicator）を提示している。副指標項目の多くは質的な指標項目であり（45副指標項目）、その評価形態は、11のチェックリスト指標群、29の投入指標群、8つの活動指標群、1つの成果指標群によって構成されている。また、Yes/No形式の質問項目と記述形式のセットによってその進捗を表現できる様に構成されているだけでなく、自己評価や、報告目的に応じた6段階評価、評価指標項目間の関係性を配慮した包括的評価、などについても配慮した報告フォーマットと

なっている（UNECE, 2005a）¹⁹⁾。とりわけ、評価目的（1～4）においては（表2）、UNESCOの教育政策の比較において利用されているISCEDフレームワークが採用されており、そのなかでも多様な対象・目的を持つ教育プログラムの比較を可能にする「ISCED-1997」²⁰⁾が使用されている。また、本報告フォーマットを見るとデータ入手が比較的容易な公教育にUNECEプロジェクトの焦点が置かれており、ノン・フォール教育やイン・フォーマル教育の重要性は指摘しつつも、公教育を中心とした評価枠組みを採用していることが窺える。UNECEプロジェクトは、3段階によるプロジェクトの実施フェーズ（Ⅰ：2005-2007、Ⅱ：2008-2010、Ⅲ：2011-2015）での展開が計画されており、UNECE加盟国の担当部署（National Focal Points: NFPs）は本報告フォーマットに基づき、国別実施報告書（National Implementation Reports: NIRs）を作成し、UNECE加盟国におけるESD活動の段階的な進捗が確認できるよう計画がなされている。

4.2 IUCN-UNESCOプロジェクト

IUCN-UNESCOプロジェクトは、UNESCOアジア太平洋地域教育局とIUCNが、オーストラリアのマッコーリ大学（Macquarie University）と協力して実施している国際プロジェクトである。IUCN-UNESCOプロジェクトは、アジア太平洋地域のUNESCO加盟国における国レベルのDESD指標開発とモニタリング・評価活動の実施にむけて、一連のガイドラインを開発することを目的に2006年3月から開始された。具体的な作業は、マッコーリ大学のプロジェクトメンバーによって調整が行われ、「ガイドライン専門家チーム（Guideline Expert Team）」による助言のもとで、「ガイドライン開発チーム（Guideline Development Team）」によるガイドライン開発が行われた。さらに、アジア太平洋地域における各国のUNESCO国内委員会と、UNESCOフィールド・オフィスやクラスター・オフィス（以下、UNESCO地域事務所）による作業グループが、「ガイドライン・レビュー・チーム（Guideline Review Team）」としてかわり、DESDにおける国別のニーズ・優先事項の明確化と、実行可

能性の検討を行ってきた。2006年3月にIUCN-UNESCOプロジェクトが開始されて以来、そのガイドラインの完成にむけて、多様な関係者を巻き込んだ段階的（第一期～第四期）策定作業が行われてきた。

IUCN-UNESCOガイドラインの開発にむけた意見は、メーリング・リスト（E-List）によって共有化され、加筆・修正にむけた議論は、2006年8月（日本・広島）、2006年12月（タイ・バンコク）の国際会合をとおして行われた。その後、公開コメントのプロセス（－2007年3月16日）を経て、2007年4月には、ガイドライン最終稿の加筆・修正作業と各国における指標開発・データ収集、モニタリング・評価メカニズム、報告メカニズムを検討するため、当該地域のUNESCO国内委員会を招聘した国際会合：「アジア太平洋地域の国別DESDモニタリング・システムの開発にむけたワークショップ」がタイ・バンコクで開催された（2007年4月）。2007年12月には、第4回国際環境教育会議（ICEE、インド・アーメダバード）の分科会において、本ガイドラインの活用にもけた議論が行われた²¹⁾。

IUCN-UNESCOガイドラインは、(1) ガイドライン本文、(2) クイック・ガイド、(3) 用語解説、(4) 参考・付録資料から構成されており、ガイドライン本文では、DESDの概要ほか、地域戦略との整合性、UNESCO国内委員会と地域事務所の役割、指標群と指標タイプ、指標タイプの選択、指標開発プロセス、データ収集、報告作業、についての記述がなされている。とりわけ、本ガイドラインは、当該地域におけるDESDの評価枠組みとして、以下の3つの指標群（現況指標群、促進指標群、効果指標群）と8つの指標タイプを提示している（表3）。

表3 IUCN-UNESCOプロジェクトにおける指標群、指標タイプとその機能

<p>【指標群】現況指標群（Status Indicators）²²⁾</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ベースラインBASE LINE：ESD全体像の現況を明確化する機能 <p>【指標群】促進指標群（Facilitative Indicators）²³⁾</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会背景CONTEXT：ESD支援システムの存在を明確化する機能 ・プロセスPROCESS：ESDの実施プロセスと活動の

存在を明確化する機能

- ・学習LEARNING：ESDに関する学習と反省を推進する機能

【指標群】効果指標群（Effect Indicators）²⁴⁾

- ・活動OUTPUT：活用できるツールや学習資源などの成果物を評価する機能
- ・成果OUTCOME：ESD関連方策の結果もたらされた変化と改善に関連する成果を評価する機能
- ・社会的影響IMPACT：ESD関連方策の結果もたらされた社会的影響を評価する機能
- ・達成PERFORMANCE：地域や国レベルにおけるESDの全体像の変化を評価する機能

Note: UNESCO, IUCN-CEC and Macquarie University. 2007a ²⁵⁾ をもとに筆者作成

さらに、本ガイドラインのクイック・ガイド²⁶⁾には、指標開発の特徴として、(1) DESDの7つの戦略の1つであるモニタリングと評価としての位置づけ、(2) 基盤となる国内DESD上位目標と優先事項の定義づけの重要性、(3) UNESCO国内委員会と地域事務所の多様な役割の認識による適切な支援の可能性、(4) 国々の多様なニーズに対応するための多目的な指標項目の採用、(5) 量と質の指標項目の設定と異なる活用方法、(6) 指標タイプの選定理由・選定目的の検討と有効性・限界の認識の重要性、(7) 国のDESD上位目標を指標項目へと落とし込む作業の必要性、(8) データ収集方法とツール・テンプレートの活用、(9) DESD指標開発とデータ収集過程における協働作業を通じた主体者意識の向上とコミットメントの醸成、(10) 活動努力を共有するための国・地域プロジェクトへの報告の重要性とコミュニケーション・ツールとしての報告フォーマット、を挙げている。

5 UNECEプロジェクトとIUCN-UNESCOプロジェクトとの「実施概要」の比較

まず、両地域のESD評価に関する国際的取り組みの動向によると、ヨーロッパ地域では、DESD国際実施計画草案（2003年7月）が発表される以前に、第5回欧州環境閣僚会議（2003年5月、ウクライナ・キエフ）において、ESDの推進にむけた地域協力に関する議論を開始している。2005年初期には、両地域ともに、地域戦略の策

表4 UNECEプロジェクトとIUCN-UNESCOプロジェクトの実施概要の比較

	UNECE プロジェクト*1	IUCN-UNESCO プロジェクト*2
実施背景	<ul style="list-style-type: none"> • DESD 国際実施計画草案 (2003年7月発表) に基づく指標開発の議論開始 • 「ビリニユス環境・教育大臣会合」の開催 (2005年3月) による「欧州 ESD 地域戦略」の採択と「ビリニユス実施枠組み」発表 	<ul style="list-style-type: none"> • DESD 国際実施計画草案 (2003年7月発表) に基づく指標開発の議論開始 • 「アジア太平洋 DESD 地域戦略」における評価活動の重要性の指摘 (2005年)
開始時期	• 2005年3月	• 2006年3月
対象地域	• ヨーロッパ地域中心	• アジア太平洋地域
実施主体	<ul style="list-style-type: none"> • UNECE • ESD 運営委員会、ESD 専門家グループ 	<ul style="list-style-type: none"> • IUCN-CEC、UNESCO、マッコーリ大学 • ESD 専門家グループ、ガイドライン開発グループ、レビュー・グループ
加盟国	• 55カ国 (EU 諸国、中央アジア、アメリカ、カナダ)、EU 諸国からは27カ国参加	• 48カ国 (アジア太平洋地域 UNESCO 加盟国)
特徴	<ul style="list-style-type: none"> • UNECE 加盟国の環境・教育大臣参画による欧州 ESD 地域戦略策定と、ESD 運営委員会、専門家グループ設置 • UNECE 評価モデル・評価スキームの開発と評価指標群の提示、評価目的に基づく国別実施報告書報告フォーマットの開発 • UNECE 加盟国の各国担当部課署の設置、地域戦略等の翻訳と、国内実施計画に基づく優先事項と社会的適合性の検討、国内実施報告プロセスへの参画 • 欧州 ESD 地域戦略、UN Commission on SD と連関と整合性 	<ul style="list-style-type: none"> • UNESCO 加盟国におけるアジア太平洋 DESD 地域戦略の策定と、専門家・ガイドライン開発・レビューチーム設置 • IUCN-UNESCO ガイドラインの開発と評価指標群・評価指標タイプの提示 • 進捗状況の把握にむけたデータ収集ツール・テンプレートの開発 • UNESCO 加盟国の各国担当部課署の設置、地域戦略等の翻訳と、国内実施計画の策定に基づく優先事項と社会的適合性の検討、国内実施報告プロセスへの参画 • アジア太平洋地域 DESD 地域戦略、万人のための教育 (EFA) との連関と整合性

*1 : UNECE.2005a., UNECE.2007a., UNECE.2007b.²⁷⁾ / *2 : UNESCO, IUCN-CEC, et.al. 2007a.を基に筆者作成

定が行われ、2005年3月には「欧州ESD地域戦略」、2005年2月には「アジア太平洋地域DESD地域戦略」²⁸⁾が策定されている。さらに、両地域では、2005年の中・下期にかけては、専門家による評価枠組みの議論が開始されている。2006年は、両プロジェクトともに、DESDの効果的实施にむけた評価システムの構築、指標群開発、報告フォーマットの開発に時間を費やしているものの、地域共通の評価枠組みの開発(評価目的の提示、指標項目、副指標項目の開発)においては、UNECEプロジェクトの主導によるものが大きい。2007年には、各評価枠組みの活用が試行されつつあるも、IUCN-UNESCOプロジェクトにおいては、IUCN-UNESCOガイドラインの完成にむけて時間を要したため、実質的利用は2007年の12月以降となっている。その一方で、UNECEプロジェクトは、第6回欧州環境閣僚会議(2007年10月、セルビア・ベオグラード)において(UNECE加盟国51カ国参加)、実施フェーズI(2005-2007)の国別実施報告書(NIRs)が36カ国から提出されており、欧州ESD地域戦略の達成にむけて必要な政策枠組みと組織体制の

構築が大半の加盟国で実施されている(UNECE, 2007a)²⁹⁾。このように、国別実施報告書の提出とその共有という点においては、UNECEプロジェクトによる先行が見られる。さらに、両プロジェクトの「実施概要」を見てみると(表4)、プロジェクトの実施背景には、UNESCO本部が発表したDESD国際実施計画草案(2003年7月発表)での、モニタリング・評価の重要性に関する指摘が、両プロジェクトに影響を及ぼしているものと考えられる。UNECEプロジェクトは2005年3月に開始されており、IUCN-UNESCOプロジェクトは2006年3月に開始されている。評価枠組みの開発においては、ヨーロッパ地域がESD運営委員会とESD専門家グループによるUNECE評価スキームの開発が行われる一方で、アジア太平洋地域は、専門家グループ、ガイドライン開発グループ、レビュー・グループが組織され、IUCN-UNESCOガイドラインの開発が行われている。両プロジェクトともに、多様な専門家を巻き込むだけでなく、公開コメントの収集や各国ニーズと優先事項を評価枠組みの改善に役立てている点、DESD国際実施計画(DESD-IIS)や地域戦略と

表5 UNECE プロジェクトとIUCN-UNESCO プロジェクトの実施内容の比較(PDM比較)

	UNECE*1	IUCN-UNESCO*2
上位目標	<ul style="list-style-type: none"> ESD を学校教育、学校外教育、イン・フォーマル教育に取り入れることを促進する 	<ul style="list-style-type: none"> DESD を通して質の高い教育の実施と、持続可能な開発にむけた現実的な社会転換
プロジェクト目標	<ul style="list-style-type: none"> 欧州 ESD 地域戦略の実施にむけて、ESD 活動をモニタリング・評価するメカニズムを構築すること 加盟国における ESD 評価活動を支援するための評価スキームを開発すること 	<ul style="list-style-type: none"> アジア太平洋 DESD 地域戦略の実施にむけて、ESD 活動をモニタリング・評価するメカニズムを構築すること 加盟国における ESD 評価活動を支援するための指標開発ガイドラインを開発すること
期待される成果	<ul style="list-style-type: none"> 成果の評価、実施プロセス評価、学習文化の構築、オーナーシップ強化、フィードバック推進 	<ul style="list-style-type: none"> 成果の評価、実施プロセス評価、学習文化の構築、能力開発、マネジメント能力強化、事例の多様な表現、オーナーシップ強化、活動進捗の明確化、関連情報・ツールの提供、フィードバック推進
活動	<ul style="list-style-type: none"> UNECE 評価スキームの共同開発、報告フォーマット開発、指標群開発、評価モデルと評価目的に基づく指標項目と副指標項目の開発、専門家グループによるメール上での継続的議論と国際会合開催・参加、国別ニーズ・優先事項の明確化と、実行可能性検討、優良事例抽出 	<ul style="list-style-type: none"> IUCN-UNESCO ガイドライン共同開発、データ収集ツール・テンプレートやクイック・ガイドの開発、指標群・指標タイプの開発、専門家・ガイドライン開発・レビューチームによるメール上での継続的議論と国際会合開催・参加、情報共有、能力開発ワークショップ開催、パイロット事業実施、優良事例抽出
投入	<ul style="list-style-type: none"> UNECE による資金投入 UNECE、ESD 運営委員会、専門家グループ、UNESCO、OECD-ENSI、European ECO-Forum、環境教育と ESD に関する政府間中央アジア作業グループ 	<ul style="list-style-type: none"> UNESCO による資金投入 UNESCO、IUCN、Macquarie University、ガイドライン専門家チーム、ガイドライン開発チーム、ガイドライン・レビュー・チーム
前提条件	<ul style="list-style-type: none"> 欧州域内のほとんどの国々において、専門的教育者雇用する教育システムの確立、全国民への基礎教育の機会と平等な教育の権利の確立、高度な識字能力の実現、開発された科学的潜在力、市民の参加が実現 学校教育における質の高い教育不可欠 教育政策の比較を目的とした ISCED-1997 フレームワークの採用 	<ul style="list-style-type: none"> 経済、社会、環境的側面において多様性が高く、共通する評価の枠組みでは、評価活動が不可能であるという前提

*1 : UNECE.2005a., UNECE.2007a., UNECE.2007b./ *2 : UNESCO, IUCN-CEC, et.al. 2007a.を基に筆者作成

の整合性を高めるなどの点では、比較的共通性が高いといえる。

6 UNECEプロジェクトとIUCN-UNESCOプロジェクトの「実施内容」の比較 (PDM比較)

さらに、両プロジェクトの「実施内容」を比較してみると(表5)、まず大きな相違点として、「前提条件」がある。UNECEプロジェクトでは、各国の多様性について言及し、評価そのものが比較をすることだけを目的としていないと指摘しつつも、相互比較が可能なシンプルな評価スキームの開発を提案している。さらに、ISCED-1997を採用するなど、学校教育を中心とした評価枠組みとなっており、IUCN-UNESCOプロジェクトよりも、参加加盟国(とくに欧州地域)の同質性を前提としている。その一方で、IUCN-UNESCOプロジェクトは、アジア太平洋地域における、経済・社会・環境的側面において多様性が高く、直面する課題も多岐にわたっていると指摘しており、国家間の相互比較は重要であるとの指摘はさ

れつつも、共通する評価枠組みでは評価活動は不可能であるという前提があるといえる。この指摘は、IUCN-UNESCOガイドラインにおける評価目的と指標項目の設定のあり方に反映されていると言える。つまり、IUCN-UNESCOガイドラインでは、各国のニーズと優先事項に基づき、達成目標の設定と指標項目の開発が、各国に一任されており、さらに、評価枠組みの一つである指標群と指標タイプの利用についても、各国の国内実施計画の優先項目に基づき選択性になっていることから理解できる。両プロジェクトの共通点としては、ESDの主たる取組みの場合は、学校教育だけでなく、ノン・フォーマル教育やイン・フォーマル教育にもあるとし、多様な教育の場における実施の重要性を認識している。さらに、両地域プロジェクトの「プロジェクト目標」を見てみると、評価プロジェクトの実施が、ESD実践の成果を評価するものとしてだけではなく、ESD実践の進捗と達成を生み出す方法として位置づけている点に共通性があるといえる。

7 UNECE評価スキームとIUCN-UNESCO ガイドラインの評価枠組みの比較

両プロジェクトの「評価枠組み」を比較する(表6)と、最も大きな相違点は、「評価目的」と「指標項目」の設定にあるといえる。UNECE評価スキームは、共通する評価目的、指標項目、副指標項目を採用することにより、各国間のESDの取組みを比較可能にしているが、IUCN-UNESCOガイドラインにおいては、国家間比較をガイドラインの実施目的として位置づけているものの、指標群と指標タイプの提示にとどまっており、共通の指標項目が開発されていない。つまり、IUCN-UNESCOガイドラインでは、達成目標と具体的な評価項目の設定は、各国の国内実施計画の優先事項に基づき、各国で設定することが一任されている。さらに、IUCN-UNESCOガイドラインでは、各国は全ての指標群・指標タイプをモニタリング・評価活動に採用する必要はないとしているため、各国のESDの取組みを相互比較するという取組みは非常に難しいといえる。この背景には、アジア太平洋地域における経済的、社会的、環境的側面における高い多様性を前提としており、共通する評価枠組みでは、評価活動が不可能であるという前提によるものであるといえる。そのほかの相違点として、進捗評価のタイムフレームが挙げられる。UNECE評価スキームでは、実施フェーズを3段階に分けており、2007年、2010年、2015年という区切りの中で、段階的に報告時期を設定しているのに対し、IUCN-UNESCOガイドラインでは、DESDの中間年である2009年と最終年である2014年にその進捗報告の段階を設けている。その一方で、両プロジェクトの評価枠組みにおいて、共通する側面も見受けられる。「評価の影響」については、ともに評価結果のみならず、評価に参加するプロセスを重要視しており、また、「評価実施時期」については、終了時評価だけではなく、時系列に対応した継続的な取り組みとして位置づけをしている。さらに、「評価の留意点」として、この評価に対する取組みが結果の評価だけではなく、(1)学習や能力開発としての意味づけが高いこと、(2)実施プロセスに重点

が置かれていること、(3)多様なステークホルダーの参加と実施報告書の作成にむけた共同作業が提案されていること、において共通性が高いといえる。また、UNECEプロジェクトおよびIUCN-UNESCOプロジェクトとともに、DESD国際実施計画(DESD-IIS)に沿った指標開発とモニタリング・評価活動を提案しており、既存データや入手可能なデータを利用し、実施プロセスを重視した指標項目を開発している点で共通性が高い。

国際協力機構の提示する参加型評価の概念表(表7)に基づき、両プロジェクトの評価枠組みを「参加型評価」という側面において考察してみると、両プロジェクトともに、一般評価と参加型評価の両側面を兼ね備えていることが見受けられる。「評価目的」においては、資金提供者に対するアカウンタビリティの確保や、プロジェクト改善のための有用な教訓・知識の確保だけでなく、報告プロセスを重視したマネジメント能力の強化や、主体性の確保に対する配慮、などが見受けられる。「評価の影響」においては、評価結果のみならず、評価に参加するプロセスで関係者に影響を与えることが意図されているだけでなく、「評価の実施時期」、「評価結果」、「評価の留意点」などにおいても、参加型評価の特徴を有しているといえる。「評価参加者の範囲」については、両プロジェクトにおいて、未だ不透明な点が多く、どのような人々が評価活動に参加するかについては、今後の検討の余地があるといえる。参加型評価の手法を採用するのであれば、受益者を含む広範な関係者の参加が促進されるものであるため、その調整と合意形成に多大な労力と時間がかかることが想定される。事実、第6回欧州環境閣僚会議(2007年10月、セルビア・ベオグラード)では、実施フェーズI(2005-2007)において、国別実施報告書の提出と共有をした点で高い評価がなされている一方、先住民や地域特有の知恵の反映には未だ至っていないとの指摘(UNECE, 2007a)³⁰⁾がなされており、DESDの評価にむけた調整と合意形成の難しさが窺える。IUCN-UNESCOプロジェクトでは、評価目的と指標項目の設定が、各国に一任されており、評価基準が協働によって開発される点において、参加型評価の側面が強いと

表6 UNECE評価スキームとIUCN-UNESCOガイドラインの評価枠組みの比較

	UNECE*1	IUCN-UNESCO*2
評価目的と評価項目	<ul style="list-style-type: none"> • (1) ベースライン・データ入手、投入評価、実施プロセス評価、活動評価、成果・社会的インパクトの評価、(2)ベンチマークや報告目的などだけでなく、進捗評価・優良事例の共有と学習を目的、比較目的ではなく、「学習し続ける地域」として学習と開発に焦点、(3)【参】UNECE 事務局と専門家グループによる報告のためのインフォーマル・ガイダンスの実施、(4)多様な参加者の参画による指標開発、(5) 実施フェーズ終了時期における評価スキームの加筆・修正作業 • 共通フレームワーク6つの評価目的と18の指標項目と、48の副指標項目（質的項目：45、量的項目：8） 	<ul style="list-style-type: none"> • (1)ベースライン・データ入手、実施プロセス評価、活動評価、成果・社会的インパクト・達成評価、(2)ESD の新たな考えを構築、ESD の経験共有、(3)【参】進捗と達成を評価する能力開発を支援、(4)【参】各国が DESD 上位目標と優先事項を明確化することを支援、(5)多様性に配慮した ESD の多様な表現方法、(6)【参】達成目標と指標項目の開発を各国に一任、(7)【参】多様な参加者の参画による指標開発、(8)【参】ステークホルダーに対し、行動と意志決定を支える情報を提供、(9)【参】ステークホルダーに対して、評価ツール提供、指標項目開発とデータ収集の支援、(10)【参】中間時期におけるガイドラインの加筆・修正 • 【参】国内実施計画の上位目標・達成目標に基づき、各国が評価項目を設定
評価の影響	<ul style="list-style-type: none"> • (1)【参】評価結果のみならず、評価プロセスで関係者に影響を与える、(2)【参】比較目的ではなく、「学習し続ける地域」として学習と開発に焦点 	<ul style="list-style-type: none"> • 【参】評価結果のみならず、評価プロセスで関係者に影響を与える（能力開発やコミュニケーション向上）
評価を与える手段	<ul style="list-style-type: none"> • (1) 国別実施報告書の作成とウェブ公開、進捗のデータベース化、(2)【参】国際会議・フォーラム開催 	<ul style="list-style-type: none"> • (1) 国別実施報告書の作成とウェブ公開、進捗のデータベース化、(2)【参】国際会議・フォーラム開催
主な対象者	<ul style="list-style-type: none"> • UNECE 加盟国の関連プロジェクト実施機関と実施主体 	<ul style="list-style-type: none"> • UNESCO 加盟国の関連プロジェクト実施機関と実施主体
評価の実施時期	<ul style="list-style-type: none"> • 【参】事前から終了時まで UNECE プロジェクトの実施している期間。プロジェクト終了後も事後評価はあり得る 	<ul style="list-style-type: none"> • 【参】事前から終了時まで IUCN-UNESCO プロジェクトで実施している期間。プロジェクト終了後も事後評価はあり得る
評価期間	<ul style="list-style-type: none"> • 2005年～2015年 	<ul style="list-style-type: none"> • 2005年～2014年
評価者	<ul style="list-style-type: none"> • UNECE 加盟国の担当課署（NFPs）による国別実施報告書（NIRs）の作成と UNECE への提出 	<ul style="list-style-type: none"> • UNESCO 加盟国の担当課署（NFPs）による国別実施報告書（NIRs）の作成と UNESCO-Bangkok への提出
評価結果	<ul style="list-style-type: none"> • (1) UNECE 加盟国担当課署と関係者間の調整・コンセンサス、(2) 担当課署の判断による国別実施報告書作成 	<ul style="list-style-type: none"> • (1) UNESCO 加盟国担当課署と関係者間の調整・コンセンサス、(2) 担当課署の判断による国別実施報告書の作成
評価参加者の範囲	<ul style="list-style-type: none"> • UNECE 加盟国担当課署（NFPs）と関係するステークホルダー、実施主体 	<ul style="list-style-type: none"> • UNESCO 加盟国担当課署（NFPs）と関係するステークホルダー、実施主体
評価基準	<ul style="list-style-type: none"> • (1) 指標群・指標目的・指標項目・副指標項目の提示、(2)【参】DESD 中間期に評価基準の見直し（2007年、2010年） 	<ul style="list-style-type: none"> • (1)【参】指標群・指標タイプ提示。達成目標・指標項目開発は各国に一任、(2)【参】DESD 中間期に評価基準見直し（2009年）
指標群の分類	<ul style="list-style-type: none"> • ベースライン・データと4つの指標群－チェックリスト指標群・投入指標群・活動指標群・成果指標群 	<ul style="list-style-type: none"> • 3つの指標群と8つの指標タイプ－現況指標群（ベースライン）、促進指標群（社会背景・プロセス・学習）、効果指標群（活動・成果・社会的影響・達成）
評価手法	<ul style="list-style-type: none"> • (1)ベースライン・データ入手（2005）、(2)報告フォーマットに基づく国別実施報告書（NIRs）作成：プロセス、作成環境（意志決定や障壁など）の記述、各副指標項目の Yes-No 選択項目と自由記述文書の作成、(3) 定量的・定性的手法の採用 	<ul style="list-style-type: none"> • (1) 各国の上位目標、達成目標に基づく評価項目の設定（定量的・定性的手法の双方の採用を提案）、(2) データ・テンプレートに基づく、評価項目ごとの情報収集手段の明確化、(3) 国別実施報告書（NIRs）の作成
評価の留意点	<ul style="list-style-type: none"> • (1)【参】(1)プロセスの評価、(2)実施効果（プロセスと長期的影響に関する質的側面）、(3)比較目的ではなく、「学習し続ける地域」として学習と開発に焦点、(4)ベンチマークや報告が目的だけでなく、進捗評価・優良事例の共有・学習、(2)【参】国別実施報告書（NIRs）作成にむけた配慮項目提示－参加型、ステークホルダー巻き込み、報告文書への公開コメント 	<ul style="list-style-type: none"> • (1)【参】多くのステークホルダーの巻き込みと共同作業による主体者意識と向上、コミットメントの醸成、(2)評価活動への参画による能力開発、(3) 透明性、(4)トップダウンとボトムアップの両方の活用、(5)管理よりも促進を重視、(2)【参】国別実施報告書（NIRs）作成にむけた配慮項目の提示－ステークホルダーの巻き込み、意志決定への参加、透明性確保
資金提供者	<ul style="list-style-type: none"> • UNECE 	<ul style="list-style-type: none"> • UNESCO
その他の特徴	<ul style="list-style-type: none"> • (1) ベースライン・データの収集（2005年1月時点）と共有による各国の現況の相違を認識、(2) 各進捗段階が明確に定義された上での段階評価、(3) 包括的で現実的な指標群の採用、(4) 4つの指標群の提示、(5) 共通フレームワークとしての評価目的・指標項目・副指標項目、(6) 採用すべき指標群と自発的に採用する指標項目の提示、(7) 記述文書と Yes/No の質問項目のセットによる質的・量的評価、(8) 記述と指標群のセットによる各課題の進捗を明確化、(9) 指標項目のセットの開発、(10) 3段階の実施報告プロセス－ベースライン・データ入手（2005）、実施フェーズ I（2005-2007）、II（2008-2010）、III（2010-2015）、(11) 国別実施報告書（NIRs）による段階的進捗報告、(12) SD 指標ではなく、ESD 指標の言及 	<ul style="list-style-type: none"> • (1) 多様性に配慮した共通フレームワーク、(2) 進捗評価だけでなく、進捗や達成を生み出す方法としての評価、(3) ガイドラインが、国別の指標開発とモニタリング・評価活動を支援するものだけでなく、関連情報の提供、各国の上位目標と優先事項を明確化、指標項目の開発とデータ収集を支援、進捗と達成を評価する能力開発を支援、行動と意思決定を支える情報を提供、(4) 国内委員会・地域事務所の役割の明示、(5) 3指標群と8指標タイプ、(6) 指標タイプの自由選択と進捗・達成の異なる表現への配慮、(7) データ収集にむけたテンプレートの提示、(8) 段階的な指標開発プロセスの提示、(9) 2段階の実施報告プロセス－実施フェーズ I（2005-2009）、II（2010-2014）、(10) 国別実施報告書（NIRs）による段階的進捗報告、(11) SD 指標、教育指標、ESD 指標の違いの提示

Note 【参】：参加型評価の概念が含まれている項目、SD：持続可能な開発

*1：UNECE.2005a., UNECE.2007a., UNECE.2007b./ *2：UNESCO, IUCN-CEC, et.al. 2007a.を基に筆者作成

表7 援助機関の参加型評価の概念

評価目的	・ マネジメント能力の強化、オーナーシップ（主体性）の強化、援助実施側、受入側双方に対する効果的なフィードバックの促進、援助実施側、受入側双方に対するアカウンタビリティ（説明責任）の向上
評価の影響	・ 評価結果のみならず、評価に参加するプロセスで関係者に影響を与える
評価を与える手段	・ 評価報告書、評価報告会、ホームページへの掲載、評価結果のデータベースに加え、ワークショップ、対話、インタビュー
主な対象者	・ プロジェクト・スタッフ、プロジェクト参加者（受益者）
評価の実施時期	・ 事前から終了時までの期間。協力後もプロジェクトを継続する場合は事後評価もあり得る
評価期間	・ 活動の一環として継続的に評価を行う
評価者	・ (1) プロジェクト・スタッフ、受益者が評価者、(2) 外部者はファシリテーター、(3) プロジェクトの内部・自己評価を重視
評価結果	・ 関係者間のコンセンサスを重視
評価参加者の範囲	・ 受益者を含む広範な関係者の参加促進
評価基準	・ (1) 評価基準は、評価参加者が共同で設定、(2) 評価過程で新たな評価基準が追加されることもある
評価手法	・ 状況に応じ参加者が決定、主に定性的な手法を用い（定量的な手法と併用）全体像の把握に努める、分析に時間をかけない手法の採用と結果の提出
評価の留意点	・ 「結果」をもたらした「プロセス」の分析重視、参加と合意形成プロセスを重視、評価参加者への評価結果のフィードバック重視
資金提供者	・ 自己資金、NGO、援助機関などに資金源を求める等多様性がある

Note：国際協力機構（2001）の一般評価と参加型評価の概念比較表より抜粋

いえる。

8 社会的適合性に関する考察

8.1 質的評価とログ・フレーム

UNECEプロジェクトにおける評価方法とプロセスは、国家間での比較可能性を重視した報告フォーマットに基づいている。報告フォーマットには、共通フレームワークとして、評価目的、指標項目、副指標項目、政策枠組み、が提示されており、投入、活動、成果、社会的インパクトに関する指標群を提示しつつ、各評価目的に対応したYes-No形式の評価項目と記述形式のセットによる量的側面と質的側面の両方に配慮した評価枠組みとなっている。UNECEプロジェクトが重視しているプロセスの側面を、Yes-No形式の評価項目と記述形式のセットで表現している点は、ヨーロッパ地域における比較を可能とした共通フレームワークでありつつも、社会的文脈や事例に見られる因果関係・相互依存関係を反映できる手法であるといえよう。

IUCN-UNESCOプロジェクトにおける評価方法とプロセスは、DESD上位目標と達成目標（Target）の明確化、指標項目の設定とデータ入手手段・方法の提示などの点において、プロジェクト・マネジメントの評価にむけたログ・フレームの作業プロセスと酷似しており、成果重視の事

業運営（RBM）手法を踏襲しているともいえる。その背景には、DESD国際実施計画（DESD-IIS）での指摘：「現実的な社会転換」の意味合いと、行動の推進と態度の変容に重視したDESDの特徴（UNESCO, 2005a）³¹⁾を反映しているものと思われる。その一方で、ESD活動の評価プロセスとしてとらえると、違和感を感じざるを得ない。この理由には、第一に、開発介入の計画を改善させるために用いられるマネジメント・ツールとしてのログ・フレームが国内における評価プロジェクトの枠組みとして一部採用されているものの、自己評価や反省的対話などの内発性を重視した評価活動の側面が弱いことが挙げられる。上述のとおり、UNECE評価スキームでは、報告フォーマットにおいて、Yes-No形式の評価項目と記述形式をセットとして取り扱っているだけでなく、自己評価の機能も位置づけている。しかしながら、IUCN-UNESCOプロジェクトでは、自己評価の視点においてはほとんど重視されていないのが現状である。さらに、IUCN-UNESCOガイドラインでは、社会背景指標タイプが提示されているものの、その意味合いがESD推進の前提となる社会支援システムの明確化を目的としており、地域文化・価値観・歴史的背景の反映といった社会的文脈の意味合いが弱いこと、指標項目の例をみると量的側面が強く、質的側面の指標項目が

充実していないこと、などの課題が挙げられる。UNECE 評価スキームにおいても、先住民や地域特有の知恵、社会文化などの活用が必要であると指摘されており (UNECE, 2007a)³²⁾、今後の当該地域における指標開発においては、社会的文脈への配慮と、社会的適合性・内発性を重視した評価活動が必要とされている。

8.2 ESD の国際的評価プロジェクトと参加型評価の整合性

参加型評価のアプローチは、両プロジェクトの「評価枠組み」に一部織り込まれており、マネジメント能力の向上とオーナーシップの強化を促す上で有用であるいっぽう、国単位の ESD の取り組みを比較するためのアプローチとしては適していないといえる。今後、ESD 活動の評価については、評価目的に対応した評価アプローチの採用が必要とされている。

9 おわりに

本稿では、ヨーロッパとアジア太平洋地域で行われている ESD 評価に関する地域プロジェクトの相互比較を試みてきた。両プロジェクトの共通点として、「プロジェクトの目標」、「評価の時期」、「評価実施時期」、「評価の留意点」などがあるものの、プロジェクト実施における「前提条件」や「評価目的」、「指標項目の設定」、「実施アプローチ」などにおいて、相違があることが明確になった。このような、ESD 評価に関する認識や目的、作業内容の相違は、地域の教育環境 (学校教育の充実度合いなど) や社会状況 (直面する課題など)、地域文化 (前提条件としての多様性など) を反映しているだけでなく、評価プロジェクトの開始時期にも関係しているといえる。とりわけ、IUCN-UNESCO プロジェクトにおけるガイドライン策定においては、先行している UNECE 評価スキームの経験をもとに、アジア太平洋地域への適合性に関する一連の議論がなされおり、アジア太平洋地域の独自性を生み出すことができた。今後、ESD の進捗と達成を生み出す方法として評価活動を継続しつつ、UNESCO のパリ本部が実施している DESD のグローバル・モニタリングに対して、両地域プロジェクトの特徴を生かした評価活

動による貢献、地域プロジェクト間における情報の共有と、評価活動そのものの継続的改善にむけた取り組みが必要とされている。

引用文献および注

- 1) UNESCO, 2005a, *United Nations Decade of Education for Sustainable Development 2005-2014, International Implementation Scheme*, UNESCO, Paris, France.
- 2) UNESCO, IUCN-CEC and Macquarie University, 2007a, *Asia-Pacific Guidelines for the Development of National ESD Indicators*, UNESCO, Paris, France.
- 3) UNESCO-IUCN CEC Asia-Pacific UN DESD Indicators Project
- 4) ログ・フレームとは (Logframe) は、ロジカル・フレームワーク (Logical Framework) の略語で、開発介入の計画を改善させるために用いられるマネジメント・ツール (OECD/DAC による定義) である。JICA で使用されている「プロジェクト・デザイン・マトリクス (PDM)」もその一例である。開発援助の分野では、プロジェクト計画表として、1960 年代後半から米国を中心に利用されてきた。今日では、成果重視の事業運営 (RBM) の流れのなかで、目標を明確にし、現況にもとづく活動計画の策定と、成果を測るための指標項目を整理するツールとして、広く活用されている。
- 5) プロジェクト・デザイン・マトリクス (PDM) とは、ログ・フレームで採用されるプロジェクト概要表の一形式。とりわけ、開発援助プログラムの計画・実施・評価という一連のサイクルを運営管理するために使用される。PDM にはプロジェクトの構成要素である「目標」、「活動」、「投入」や、「外部条件」などの要素間の論理的な相関関係が示されている。利点として、的確で効率の良いプロジェクト運営管理や、ニーズに応じたプロジェクト立案、プロジェクト運営管理に関する共通用語の共有による円滑なコミュニケーション、などが挙げられる。
- 6) 国際協力機構, 2001, 国際協力と参加型評価,

- 国際協力機構, p.24.
- 7) 国際協力機構, 2001, 前掲 p.24.
- 8) UNECE加盟国からの専門家(アルメニア、オーストリア、カナダ、フランス、ギリシャ、イタリア、リトアニア、オランダ、ロシア、スロバニア、スウェーデン、イギリス)、UNESCO、環境教育・ESD中央アジア政府間グループ、OECD-ENSI、ヨーロッパ・エコ・フォーラム、市民環境組織の連合体、など
- 10) ESDの評価に関するヨーロッパ地域の動向については、佐藤真久, 2008, ESDの評価に関するヨーロッパ地域の実施動向: 国連欧州経済委員会(UNECE)のESD評価プロジェクトに焦点を置いて, *ESD-J報告書*, 国連持続可能な開発のための教育推進会議, pp.138-144.に詳しい
- 11) UNECE, 2005a, *Indicators for Education for Sustainable Development*, Progress Report on the Work of the Expert Group. UNECE. (CEP/AC.13/2005/9)
- 12) フェーズアウト・アプローチとは、開発プロジェクトにおける開発加入の主体の役割を段階的に削減させ、地域住民の主体者意識を向上と自助努力を支援する手法を意味する。災害復興、識字支援、村落開発などにおいて実際に活用されており、開発介入の主体が戦略的に退役・撤退する時期の見極めが重要とされている。
- 13) UNECE, 2005a, *Ibid.*
- 14) Raaij, R., 2006, *Indicators to Measure the Effectiveness of the Implementation of the UNECE Strategy for ESD*, Presentation Material, Review Meeting of the Asia-Pacific Guidelines for National DESD Indicators, 10-11, August 2006, Hiroshima, JAPAN.
- 15) UNECE, 2005b, *UNECE Strategy for Education for Sustainable Development*, UNECE. (CEP/AC.13/2005/3/Rev.1)
- 16) UNECE, 2005a, *Ibid.*
- 17) UNECE, 2007a, *Chair's Summaty*, Sixth Ministerial Conference "Environment for Europe", Belgrade, 10-12 October 2007.
- UNECE. (ECE/BELGRADE. CONF/2007/9)
- 18) UNECE, 2006, *Indicators for Education for Sustainable Development, Reporting Format*, Addendum. UNECE (ECE/CEP/AC.1/2006/5/add.1)
- 19) UNECE, 2005a, *Ibid.*
- 20) http://www.unesco.org/education/information/nfsunesco/doc/iscled_1997.htm
- 21) ESD評価に関するアジア太平洋地域の動向については、佐藤真久, 2007, アジア太平洋地域DESD国別指標開発ガイドラインとその策定プロセス, *ESD-J報告書*, 国連持続可能な開発のための教育推進会議, pp.170-178 に詳しい
- 22) 国のESDの立ち位置 (Position or Standing) を決定する変数を評価。
- 23) ESDへの参画を支援、促進する変数を評価。促進指標群 (Facilitative Indicators) は、UNECEの指標開発プロジェクトでは採用されておらず、アジア太平洋地域のDESD指標開発の特徴の一つ。今後、アジア太平洋地域の社会に適合した指標項目の開発が期待されている。
- 24) DESDにおける初期、中期、長期的な達成に関する変数を評価。
- 25) UNESCO, IUCN-CEC and Macquarie University, 2007a, *Ibid.*
- 26) UNESCO, IUCN-CEC and Macquarie University, 2007b, *Monitoring and Assessing Progress During the UN DESD in the Asia Pacific Region, A Quick Guide to Developing ESD Indicators*, UNESCO, Paris, France.
- 27) UNECE, 2007b, Declaration "Building Bridges to the Future" Sixth Ministerial Conference "Environment for Europe", Belgrade, 10-12 October 2007. UNECE. (ECE/BELGRADE. CONF/2007/8)
- 28) UNESCO, 2005b, *Working Paper, Asia-Pacific Regional Strategy for Education for Sustainable Development*, UNESCO, Bangkok, Thailand.
- 29) UNECE, 2007a, *Ibid.*
- 30) UNECE, 2007a, *Ibid.*
- 31) UNESCO, 2005a, *Ibid.*
- 32) UNECE, 2007a, *Ibid.*